
冬と彼女に病院が俺は

うぐいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬と彼女に病院が俺は

【NNコード】

N1710D

【作者名】

うぐいす

【あらすじ】

昔、付き合ってた幼なじみが入院した。未だに忘れない俺はいやいやながら彼女に会いに行く事になる。

幼なじみ

肌を刺すような寒々しい空氣に柔らかい日光が射し込んでくる様な、そんな気持ちのいい冬のある日。

街はネオンや裝飾が輝き、人々は一層騒がしくなり、赤服のおじいさんを迎える体制が少しづつ出来始めた頃。

俺は病室の前に立っていた。

病室のネームプレートには

石井美奈子

と書かれている。

俺が昔大好きだった、今でも愛しくて、俺の心を縛りつけている人の名前。

俺とミナは家が隣同士で、ミナの方が2つ上だが兄弟同然に育った、いわば幼なじみである。

お互いの家でご飯を食べるなんて日常で、そのまま泊まって一晩中一人で話してゐるなんて事も多々あつたくらいだ。

いつもボーッとしていて、俺がついていないとすぐ迷子になつて泣き出す泣き虫な女の子だった。

でも、妙に正義感が強く、頑固な子だった。

あにつを語るエピソードにこんな話がある。

ミナが小三で俺が小一のころ、一人で遊んでいる時に捨て猫を見つけた事がある。まだ子猫だった。

可哀想つて内緒でミナの家に捨て歸ったが、すぐに親に捨ててこいつて怒られてしまった。

俺が泣きながら捨てようとしたが、ミナが頑として諦めない。

子猫を抱きかかえ、一晩中正座して親に頼みこんみ

とりあえず今日は寝な

と言ひ親の言葉を頑として受け付けず、といつといつ認めさせたといつ。

いつも何考えているかわからない笑顔でホーヤつとしているが、芯が強い幼なじみだった。

二人でいるのが日常で、いないと調子が狂う。

そんな俺達が付き合い始めたのは自然な流れで、どちらが告白する

わけでもなかつたし、ハツキリと好きといつ気持ちではなかつたが、二人の時間は本当に居心地よかつた。

だが、そんな一人に終わりがやつてきた。

ミナが大学に入ると、俺は簡単に捨てられた。

同じサークルの先輩に告られた。ごめんね。

本当に簡単だつた。

大切な物は失つて初めて気付くとはよく言つたもので、俺は喪失感やら虚無感やらで地獄のような日々が続いた。

本当にどこに行つても、何をしてても考えるのはミナの事で、あいつが頭に浮かぶ度に泣きそうになる。

そんな日々。

しかし時間とは便利なもので、どうにか立ち直つた俺は、当時妙に認められていたサッカーに没頭する。

ミナを忘れようとスポーツに打ち込む。

一応、県で優勝し全国も経験した。

しかし何の気まぐれか、大学には勉強で入り、適当な大学で適当な大学生活。

その生活にはミナは全く入っていなかつたが、俺はあいつを忘れる事が出来なかつた。

何をしていようが頭にはあいつの笑顔があつて、どこにいようが目はあいつを探していた。

他の女の子とも付き合つたが、やはり長続きしなかつた。

そんな大学生活を満喫して一年がたつた頃

あいつが入院したと聞いた。

再会

親に半ば強制でお見舞いに行くよう言われ、渋々向かう俺。
昔はあんなに仲良かつたのに、どうして嫌がるの？
なんて言わても、昔こっぽくフラれて、今も引きずつてゐるなん
て口が裂けても言えない。

病院のロビー？玄関？に入ると彼女の親がいた。

久しぶりねえだの立派になつてだの言われたが、正直面倒だった。

「あいつも君がなかなか絡んでくれないと寂しそうにしていたし、
絶対喜ぶから是非会つていつてくれ。」

「はあ……。」

ミナが俺に会いたがつてる？

社交辞令が見え見えだった。ちょっとやさぐれた気持ちになる俺。

病室を聞き、エレベーターに乗つた。

…緊張する。

会いたい。でも会いたくない。

どんな顔で病室に入る？

何を話せばいい？

拒否されたら？多分、俺は立ち直れない気がするぞ。

…落ち着けよ。ただの幼なじみだろ？

普通な顔して、大丈夫かとか話せばいい。

拒否なんてされないや。幼なじみなんだから。

全く落ち着かなかつた。

ガチガチのまま病室の前まで来てしまつた。

「どうしよう。帰りたい。

でもここまで来たら引くわけにもいかない。

行くしかないんだ。

決心してドアをノックする。

「はい、どうぞ。」

それは懐かしい、そして未だに愛おしこと感じる虹だつた。

ミナだー・どうしようー!?

まだ迷うか? いけよー!

ドアノブに手を伸ばす。

クソ、手が震えてやがる…。

ガチャ

ドアを開けた。

そこには彼女がいた。

大人びて、更に綺麗で可愛くなっていたが
本当に、どうしようもないくらい彼女だった。

目が合ひ。

頭が真っ白になる。

何も考えられない。

見つめ合っていたのは多分三秒くらい。

俺には一萬年と二千年くらいに感じたが……。

ほにゃ

つて彼女は笑った。

目尻が下がって、口の端が少しだけつり上がる。

昔から全く変わらない笑顔だ。

「久しぶりだね。」

「…おお。」

「田て焼けたねえ」

「…おお。」

「また背伸びた？」

「おお

「おおばっかりじゃわかんないよ。」

そんな事言われても、それが精一杯で、限界で、一杯いっぱいだった。

「元気だつた？」

「おお。」

「またそれ？」

そう言いながら笑う彼女を見ながら、俺は泣きそだつた。

聞きたい事だとか、言いたい事とか山ほどあるけど、
彼女は俺を拒否しなかった。

それが俺にはす「」こ安心と言つか、嬉しかった。

本当に泣きたくなるくらい嬉しかったんだ。

病院で

12月の終わり頃、クリスマスもいよいよとなり、街にはケーキやプレゼントの特売が盛んになってきた。

そしてその日は晴れていて、連日の凍える寒さより大分マシな、いわゆる小春日和という奴だらう。

そんな日に、俺は病院の中庭にいた。

「寝てなくて大丈夫なのかよ？」

「大丈夫だよ！元々そんな大変な病気じゃないしね。」

ミナも一緒だった。

ミナはパジャマの上からセーターにカーディガンと完全防寒体制をしていたが。

俺が病室に着くとすでにその格好で、いきなり

外行くよ！

とか言い出して

大丈夫なのかよ

医者には言ったのか

とか言いながら渋る俺を無理やり引っ張つて行きながら今に至る。

「そりいや、お前何の病気なの？」

「…？言つてなかつたっけ？」

「言つてねえよ。」

「肝炎かな。なんか風邪を酷くした感じみたい。1月中には退院だつて。」

「肝炎？詳しく述べねえけど、それは多少マシとは言え冬に外出歩いて大丈夫な病気なのか？」

「つむさいなあ。あたしの勝手！こんなに気持ちいいのに外でないのは拷問だよ。」

確かに久々の暖かい太陽の日差しは気持ちいい。

確かに久々の暖かい太陽の日差しは気持ちいい。

と伸びをした時だった。

一ヤー

猫の鳴き声が聞こえた。

「猫！？」

ミナは真っ先に反応する。

「ビニ、ビニニニーのー。」

「あー。あやーだ。ベンチの下。」

「ほんとだあ。猫、猫、いつおいでー。」

ものか」こと勢いで猫に近づけた。

おこおこ、そんな感じやあ…。

「ああ。行かけたあ。」

猫は一皿散に逃げ出した。

「ハツヤハツだわ。ハツコネバ、前に飼つてた猫はどうした？」

ふと、リリナが一晩正座で飼つひとを認めさせた猫を思つ出した。

「キー君の事?」

彼女は急に悲しげな顔になつた。
けど、気がつかずに話を進める俺。

今思つと

もつ少し空氣読め

と思ひ。

「ああやう、キー暫つてお前だけ。昔、親に秘密で飼おつとした。

彼女は言つて泣き、今にも泣き出しそうな顔で言つた。

「

「死んじやつたよ。」

「…やうか。」

「去年の一度クリスマスの日。もつ年だつたし。」

本当に泣いているような顔だった。

去年のクリスマス。俺は確かサークルの飲み会で死ぬほど飲まれ、
気付くと友達の家でつぶれてた日だ。

あまりの違いに少しショックだった。

彼女は多分、泣いたのだろう。

悲しかつただろう。

その時、俺は隣にいるどうか、バカみたいに酔いつぶれていた。

それは、今までの一人の距離を表しているようで、あまりにも違う
年月を過ごしてきた事の証明のようで、すごく悲しかった。

でも、今の彼女は俺の近くにいる。

そして彼女は、泣きそうな顔をしている。

違う年を重ねたけど、今は、今の彼女には笑っていて欲しくて

「じゃあ、一人で一周忌やるうか。」

そんな事を言いだしていた。

「…一周忌つて。」

ミナは

もう少し言い方考えるよ
つて顔でこっちを見ている。

ヤバい。しくつた。

「おっ俺、花とか買つてくるから、一人でまたニコドーなつ？」

「まかし下手だなあ、俺。

ミナは慌てる俺をクスクス笑いながら見ている。

…どうにか、フォローしきれたみたいだった。

「ふふ。考え方くよ。」

でも、そういうた彼女の顔は悲しげだった。

クリスマスの大学

「では、年明けのレポートは忘れないよ。終わります。」

最近初老を迎えました

という感じの教授が教室から出ていき、午前最後の講義が終わりを告げた。

人間とは現金な生き物で
終わります

終

辺りから、教室中が一気に活気だした。

いや
では
辺りかもしねない。

まあ、俺もその一人なんだけど…。

見事な復活劇を遂げた俺は気合いを入れ直し、カバンに荷物を放り込み、席を立とうとした。

「あれ？ 昼食つてかないの？」

色白で長身なまあまあ男前な男が声をかけてきた。

大学からの友人で、名前は落合雄一。

見た目はさわやかでノリがよく面倒見もいいが、お兄さん役というか、相談役になる事が多いうらしく、あんまり女の子関係の話は聞か

ない。

「今日は午後から授業ねえし、外で食つわ。」

「マジで？なんだよ、午後から大杉達と遊び行いとしてたのに。
それに今日はサークルの飲み会だら？」

「悪い！また誘つてくれ！飲み会は7時からだから間に合つし。」

「まあ、わかつたけどさ。何？女関係？」

「…だといいんだけどな。多分、男に見られてない。」

「大変そうだね。頑張つて！」

「ありがと、頑張るわ。」

「撃沈したら言いなよ。大笑いしてやるし。」

「余計なお世話だ。」

雄一の言葉に苦笑しながら教室を出る。

最初のお見舞いから一週間がたつていた。
毎日、時間見つけては病院には通っている。

そして今日はクリスマス、一周忌をやつと書いた日だ。

そういう意味でも今日は行きたいし、また単純に楽しいからつてい
う意味でも行きたい。

男友達とバカやるわけでもなく、女の子といちゃつくなわけでもなく、ただ毎日グダグダくだらない話をして、時間がふわふわ過ぎていくのが好きなんだ。

それに今日はもう一つの決意もある。

今まですごい気になっていたが、触れられなかつた話題。

彼氏とはどうなつたか。

正直、毎日お見舞いに行くのはそれが知りたいつてのもあつた。

とんでもなく女々しい話だが、直接聞く勇氣のない俺はまだ付き合つてるならお見舞いに来るだらう。そしたら距離を取ればいい。

付き合つてないなら来ないし、来ない間は彼女のそばにいてもいいだらう。

そんな風に考えていた。

そしてまだ来ていない。

一週間来ないならもう別れたんではないか、そんな風に膨らむ期待と、それは自分に都合よく考えてないかつて、膨らんだ期待を裏切られるのではという不安。

その板挟みで地味に悩んだ結果、やはり、彼女に直接聞くこと

結論になつたのだ。

きっと大丈夫。

自分に言い聞かせ、病院に向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710d/>

冬と彼女に病院が俺は

2010年10月28日08時05分発行